

学塾碑

(栖本・河浦・本渡)

江戸時代公的教育制度は確立していなかった
ただ、幕府の昌平坂学問所や藩校はあったが、当然一般人は学べるところではなかった

しかし、識字率は当時世界トップクラスだったという
それは、民間人による教育機関が数多く存在していたからである

また一般人にも、教育を受ける下地があり、かつ社会が知識を必要としていたからだろう

寺子屋や上級学塾を開き、民間人を指導した人々の
(墓碑が天草にも少なからず存在する。

栖本河内の吉田東壁先生の碑

五和御領の正倫舎・中村頤亭先生、中天錫先生の碑

本渡古川の平方権之助先生の碑

河浦一町田の定舜上人碑などがそれである



徳田屋塾の
平方権之助先生の墓
本渡古川・柏木共同墓地



正倫舎の
中天錫先生の墓
五和御領・芳證寺裏墓地



学半舎塾の
吉田東壁先生の墓
栖本河内・実行寺墓地

吉田東壁先生の墓碑

天草市栖本町河内

学半舎跡地の案内板は、民家の前に建てられているが、栖本町文化財保護委員会(旧栖本町)の標柱は実行寺の境内に建てられている。

東壁先生の墓は学半舎跡のほぼ道向かい、実行寺裏の墓地にある。

「脩誉文林東壁居士 万延二年十一月廿五日 俗名 吉田佐太一義佐」

また、隣の吉田家の法名塔には、「昌徳院修誉文林東壁居士」と刻まれている。墓の後ろには、顕彰碑が建てられている。細かい字で顕彰の言葉が刻まれているが、判読はしていない。

さらに、五十三名の門人の名が刻まれている。

(五十三名の人数については、「図説天草の歴史」より)

【天草市教育委員会の説明板】

天草市文化財

学半舎跡

指定年月 昭和52年10月1日

学半舎とは吉田東壁の開いた塾名であり、かつここは塾の門人たちで賑わっていました。

東壁は寛政九年(一七九七)、河内村に生れ、名を佐太市といい、東壁は号です。福岡藩の儒学者であり、医者でもあった亀井南冥に学んだ東壁は、天草でも優秀な漢学者の一人であり、大變博識であったといわれています。

幕末期の文政元年(一八一八)から文久元年(一八六一)までの四十年余りわたってこの学半舎で教鞭をとりました。天草のほぼ全域から庄屋等の村役人や僧侶、名門の子弟が学半舎に入門し、門人は数百人を数えたといわれています。東壁の元を巣立った門人たちは、県内外を問わず活躍しました。

平成22年3月 天草市教育委員会



正倫舎

宝暦10年(1760) 御領村儒者 中村頤亭、私塾正倫舎を開設。

明和3年(1766) 中村隆成(天錫)、郷を出て、京大阪の諸大家の門を敲き、経学詩文を学ぶ。

明和4年(1767) 中村頤亭死去。

明和5年(1768) 中天錫、小山清兵衛の後援を得て、正倫舎を受け継ぎ開塾する。

寛政元年(1789) 中天錫死去。46歳。正倫舎廃絶する。

文化元年(1804) 小山清四郎、御領大島で開塾。正倫舎を再開。

嘉永元年(1848) 柏木辰五郎、正倫舎の後を引き継ぎ玉壺堂を開塾。

(天草近代年譜)

中村頤亭先生之墓

【説明板】

儒者 中村頤亭先生の墓

頤亭は、佐伊津出身で、通称弥右衛門、字(あざな)は維明、王淵と号した。芳證寺五世実明に学び碩学の聞こえが高かった。宝暦10年(1760)御領村に私塾「正倫舎」開き、専ら子弟の教導に当たる。当郡、私塾の草分けといわれ、同門より碩学、中天錫を出す。明和4年(1767)9月17日歿。

御領まちづくり振興会



御領・芳證寺裏墓地

中てんしゃく 天錫先生の墓

【説明板】

儒者 中天錫先生の墓

御領組大庄屋七代中村養左衛門茂済の嫡子、中村嘉七郎隆成、天錫と号した。22歳で大庄屋見習いとなったが、病身のため大庄屋職を弟に譲り、明和3年(1766)京都・大阪に出て諸大家の門をたたき、経学・漢学を修め詩文を磨いた。明和5年(1768)中村頤亭没後、義父小山清兵衛(大島郷)の援助を得て、私塾「正倫舎」の跡を継ぎ、子弟の教導に当たる。寛政元年(1789)46歳で没し、ために「正倫舎」も廃絶した。

御領まちづくり振興会

天錫は病身のため、大庄屋職を弟に譲るとあるが、次のようなこと
があり、大庄屋職を継ぐことに嫌気があつたためもあるようだ。

明和2年(1765) この日、江戸役人御領村に入る。

(江戸役人支配勘定岸本弥三郎、普請役内藤源八郎上下8人)

雨降る。御領組大庄屋見習い中村喜七郎隆成(天錫と号し、当時二十
二歳)、父に替りこれを村口に出迎える。遇々、雨傘高足駄にて居たる
を、幕吏見咎めいたく叱責、下駄を脱し雨中に土下座平伏せしめられ
る。隆成心中憤激措かず、早くも職を抛つべく決意す。

(天草近代年譜)



御領・芳證寺裏墓地

平方権之助先生の碑

平方権之助先生師弟顕彰碑

平方権之助先生は町山口村字浜津徳田屋平方家の出。

天保元年（一八三〇）より明治五年（一八七二）までの四十二年の間、寺子屋教育の門を開いた。その間教導した生徒数は百十三名にのぼり、本渡の寺子屋九門、九教師中最も永く最も多人数の開講であつた。

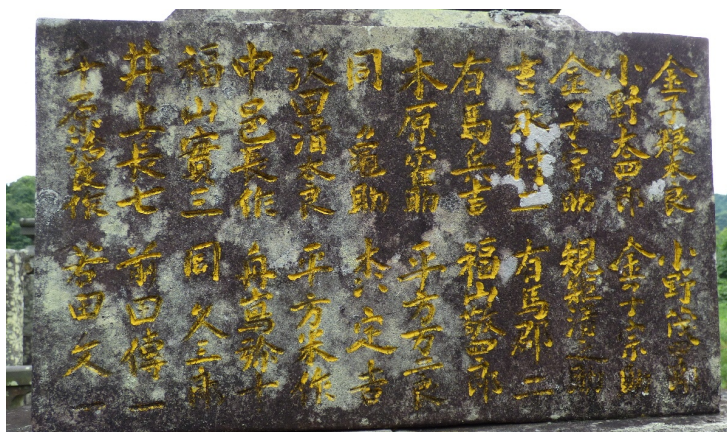
恩師没後、薫陶を受けた門人中、現存者六十七名によって、謝恩と供養祈念し、茲に碑を建立した。この碑に名を刻まれている人々は、卒業後、それぞれ成業を収め、郷土の発展の基礎を築くと共に文化振興に多大の貢献をした人が多い。

この事績を高く評価し、教育史の貴重な遺産としてここに明記し、師弟ともども後世に顕彰さるべきと思う。

一九九七年六月一日

郷土史家 鶴田 文史

同 謹書 上中万五郎



平方権之助先生の墓と子弟（一部）

天草市古川町・柏木共同墓地

上原典礼

典礼は、医者であり、かつ漁業功労者としての重きが碑文に置かれているが、医業のかたわら、村童たちに読書や筆算を教えた。

（上原典礼案内板）

典礼は天保三年（1832）生れ。幼名礼太郎。

嘉永元年（1848）、十七歳の時、豊後日田の碩儒広瀬淡窓の門（咸宜園）に入る。その後、熊本藩医深水玄門の門（活人洞）に入り、医学を学ぶ。二十歳の時、先生の代診として横井小楠の脈を見る機会があった。その時、小楠から、漢方もよかるうが、蘭学をやってみてはどうかと勧められる。このころ、天然痘（疱瘡）が大流行していた。開学者の小楠は牛痘を人体に植えれば、疱瘡を予防できると知っていたのである。そして、長崎の町役人であり、絵師であり、医師であった木下逸雲に種痘術を学ぶ機会に恵まれた。この時、木下逸雲に種痘術の伝授を受けたのは、天草人で二十名いたという。

なお、天草で最初に人痘接種を試みたのは、坂瀬川村の医師本郷玄成である。天保十三年（1842）のときである。人痘法は危険であったが、牛痘法はまだ日本には入っていなかった。世界的には牛痘法が開発されたのは、1798年（寛政十年）イギリス人医師ジェンナーによって発表された。日本には、文政六年（1823）シーボルトによって、この法が伝えられたが、有効な牛痘菌は不完全であった。やっと有効な菌が入ったのは、嘉永二年（1849）の時であった。

したがって、上原典礼らが牛痘法を学んだのは、まだできたてのほやほやの医術であった。

典礼は、安政四年（1857）、二十六歳の時、本式に帰村し、養父の医業を助ける傍ら、村童たちに読書筆算を教えた。この時から広瀬淡窓から貰った典礼を名乗った。

赤崎に帰った典礼は、医業のかたわら、明治初年、翠覆社という協同組合の組織を作り、洋牛を導入したり、自費を投じてイカナゴ漁業を起こしたりした。また、再度にわたる大火後の復興に貢献する。



上原典礼顕彰碑

天草市有明町赤崎